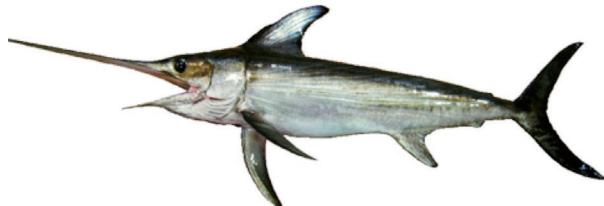


メカジキ 北太平洋

Swordfish, *Xiphias gladius*

利用・用途

切り身（ステーキ）、刺身、寿司、煮付け

管理・関係機関

中西部太平洋まぐろ類委員会 (WCPFC)
全米熱帯まぐろ類委員会 (IATTC)
北太平洋まぐろ類国際科学委員会 (ISC)

最近の動き

2014 年 2 月に ISC カジキ作業部会において最新の資源評価が行われ、中西部北太平洋系群については現在の資源量は乱獲状態になく、漁獲も過剰漁獲状態ではないとされた。また、東部太平洋北部系群については現在乱獲状態ではないものの、過剰漁獲に陥りつつあるとされた。これら結果は同年 7 月に ISC 本会合で承認された後、8 月の WCPFC 科学委員会に報告された。

生物学的特性

- 体長・体重：4 m (全長) • 300 kg
- 寿命：15 歳以上
- 成熟開始年齢：3 歳
- 産卵期・産卵場：周年、熱帯・亜熱帯海域
- 索餌期・索餌場：秋から冬、温帯域
- 食性：魚類、頭足類
- 捕食者：調査中

漁業の特徴

漁獲の半分以上は、本種を主対象に浅く漁具を設置する夜間のはえ縄で漁獲するが、大目流し網、突きん棒、まぐろ類を狙うはえ縄の混獲でも漁獲する。

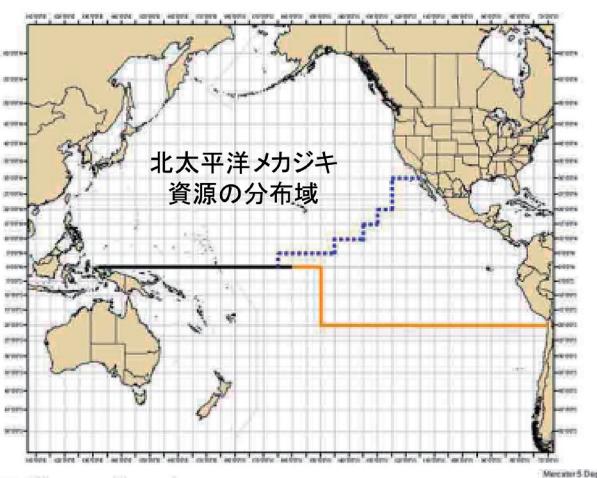
漁獲の動向

ISC に報告された北太平洋におけるメカジキの総漁獲量は、1960 年前後に 2 万トンを上まわったが、その後急激に減少し、1 万トン前後に落ち込んだ。しかし 1980 年代以降米国及び台湾の漁獲量の増加により、全体で 1.5 万トン以上になった。漁獲統計はまだ不十分なので今後更に整備する必要がある。2000 年代に入ると、台湾の漁獲量が増加したものの、米国やメキシコの漁獲量が減少したために、総漁獲量は再び減少している。

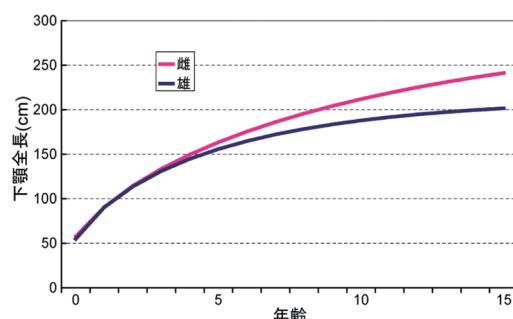
我が国の漁獲量は、1980 年代後半までは 0.8 万～1.2 万トンであったが、1994 年以降は一貫して減少傾向にあり、2011 年には 4,500 トンほどにまで減少したが、その後若干増加し、2014 年には 6,100 トン（暫定値）へと回復している。1990 年代以降の漁獲量の減少は、遠洋・近海はえ縄による漁獲の減少によるものである。

資源状態

本資源の最新の資源評価は、ISC カジキ類作業部会において 2014 年 2 月に行われ、中西部北太平洋系群については現在の資源量は乱獲状態になく、漁獲も過剰状態にないとされた。また、東部太平洋北部系群については現在乱獲状態ではないものの、過剰漁獲に陥りつつあるとされた。これらの結果は同年 7 月の ISC 本会合で承認されたのち、同年 8 月の WCPFC 科学委員会に報告された。次回の資源評価は 2017 年に予定されている。



北太平洋のメカジキ系群の分布域
中西部太平洋系群の分布は黒線で示した赤道以北の海域、東部太平洋系群の分布は黄線で示した海域、両系群の境界線は青い点線で示した。

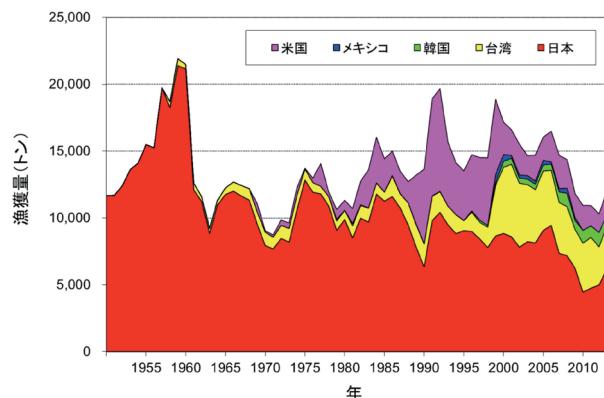


北西太平洋のメカジキの成長曲線 (Sun et al. 2002)

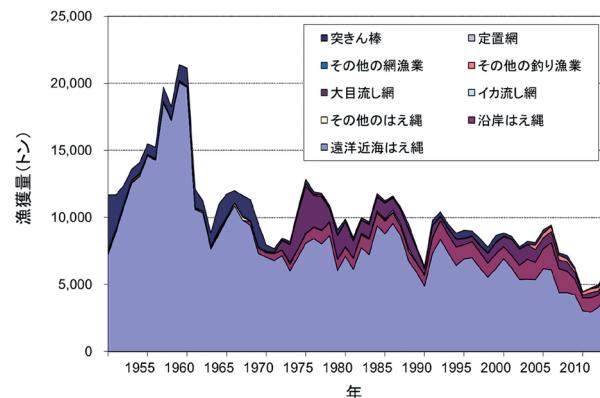
管理方策
中西部北太平洋系群については、資源状態は健全であるとの ISC の資源評価結果もあり、本資源に関する保存管理措置導入の議論は行われていない。東部太平洋北部系群についても、IATTC において議論は行われていない。

資源評価のまとめ
■中西部太平洋系群：現在の資源量は乱獲状態ではなく、漁獲も過剰状態はない
■東部太平洋北部系群：現在乱獲状態ではないものの、過剰漁獲に陥りつつある

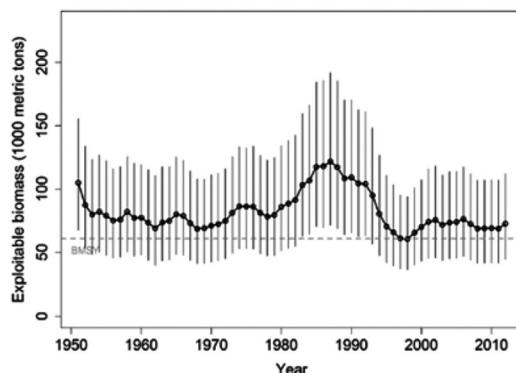
管理方策のまとめ
■中西部太平洋系群：なし
■東部太平洋北部系群：なし



北太平洋（赤道以北）におけるメカジキの国別漁獲量

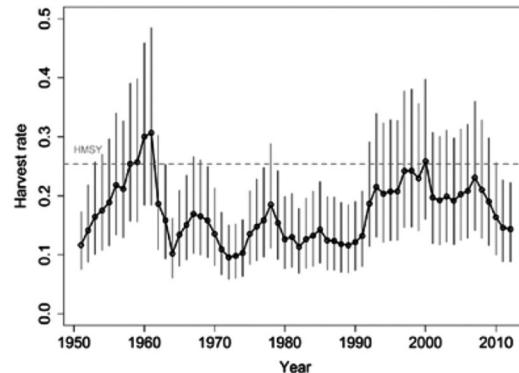


北太平洋（赤道以北）におけるメカジキの我が国の漁業種別漁獲量



プロダクションモデル解析の結果

左図は、開発可能な資源量（黒丸、1951～2012年）及び最大持続生産量の生産に必要な資源量（点線、 B_{MSY} ）を示す。右図は、漁獲率（黒丸、1951～2012年）及び最大維持生産量の生産に必要な漁獲率（点線、 H_{MSY} ）を示している。両図とも、エラーバーは95%信頼限界を示す。



メカジキ（北太平洋）の資源の現況（要約表）		
	中西部北太平洋系群	東部太平洋系群
資源水準	高位	高位
資源動向	安定	増加
世界の漁獲量 (北太平洋) (最近5年間)	10,305～11,951 トン 平均：11,189 トン (2010～2014年)	
我が国の漁獲量 (北太平洋) (最近5年間)	4,459～6,242 トン 平均：5,324 トン (2010～2014年)	
最新の資源評価年	2014年	2014年
次回の資源評価年	2017年	2017年